

身近な課題に取り組み生きる力を育む 地域課題解決型キャリア教育

地域創生が叫ばれ高大接続改革が間近に迫る今、これからの地域と学校の在り方はどうあるべきか。「まちなかのふるさと教育」を推進する管理職と主幹教諭のお三方に、地域と学校運営のビジョンを語っていただきました。

持続可能な社会と 社会の形成者を育てる 「まちなかのふるさと教育」

第14回 岡山後楽館高校(岡山・岡山市立)



取材・文／江森真矢子

1999年、市立定時制高校の発展的解消により生まれた岡山後楽館高校は三部定時制、単位制の総合学科、そして全国初の併設型公立中高一貫教育校としてスタートした。校地や制度の変遷を経て(図1)、今は

「岡山市」を 課題研究のテーマに

1年目の15年度にまず手をつけた

岡山駅のほど近くに位置している。「何もかも前例のない学校でした。時間割がみんな違う、出席をどう取る？ 行事は…？ 手探りで学校を作ってきました。全日制に移行した今も制服、チャイムはなく校則は「社会のルールとマナー」。多様な生徒を受け入れる学校でありたいし、自主自律の旗印は今後も変えません」と快活に話すのは上林栄一校長。開校初年に教諭として赴任し、次は教頭として、そして3年前に校長として戻ってきた。この間、県立博物館や、県庁知事部局での県史編纂、市役所などで地域づくりに携わった経歴の持ち主だ。同時に主幹教諭として着任したのが室貴由輝現教頭。室教頭は県立矢掛高校で学校設定科目「環境」「やかげ学」を立ち上げ、ESDや地域・学校協働の先進例を作ってきた人物。2人の着任により、持続可能なまちな、ひと、学校という視点をもった取り組みが始まった。

のは総合的な学習の時間。それまで自由テーマで行っていた課題研究を岡山市に関連するものに変更した。「岡山市立唯一の高校なのにどうしてもっと岡山市とやらないのか。校長がいろんなパイプをもっていることを生かしたいと思いました(室教頭)。当時、室先生が所属していた1年次で12月から始まった課題研究。オリエンテーションでは地域課題に取り組む意味を生徒に、そして先生たちに向けてプレゼンした。社会の変化を背景にした高大接続改革や他県の状況も踏まえ、持続可能な社会を目指す、変革を作り出せる人が求められていること。自身が幸せに生きていくために作りたい社会、自分自身は？と問いかけたのだ。

背景には、生徒に課題意識をもたせたいという思いがあった。室教頭は「地方創生が叫ばれていても、自分たちが地方に住んでいるという意識がない。衰退を身近に感じ、生活の中に課題がある田舎の学校の生徒と違って、課題意識をもつのは難しいと感じました」、上林校長は「高校は全県、中学は全市が学区なので田園地帯に

コラム1 総合的な学習の時間



1年次：「岡山」をテーマにした課題研究を行い、地域課題と出会いながら研究手法を身に付ける。大学教員を講師に、アンケート、フィールドワーク、プレゼンテーションについて学んだのち、市役所各課職員から聞いた市政の現状と課題に対し、解決方法を提案する。12月からは次年度に取り組むテーマを決め、研究計画を立てる。
2年次：テーマごとのゼミに分かれ、グループ研究を行う。引き続き地域課題をテーマにする生徒が多い。1月に中間発表を行い、年度末には研究レポートを書く。
3年次：6月の最終発表会の後、個人での論文作成に入る。10月末を締め切りとし、振り返りを行って終了する。

図1 岡山後楽館高校のあゆみ

1999年	岡山市立岡山工業高校、同岡山商業高校募集停止 天神地区に岡山後楽館中学校・高校開校 高校は3部定時制、単位制、総合学科高校として誕生
2000年	旧専門学科廃止。旧商業高校校舎を閉校
2002年	3部制から一括募集へ切り替え 旧工業高校校舎を閉校
2010年	コミュニティスクール指定
2012年	全日制へ移行 新校舎が完成し、現在の南方地区で新年度スタート
2015年	上林栄一校長、室貴由輝主幹教諭赴任 総合的な学習の時間の探究テーマを「岡山市」に絞る
2016年	総学での地域の学び本格化
2017年	西川水族館、らっかんランチ食堂スタート



左から 下村雅和先生(主幹教諭) 上林栄一先生(校長) 室貴由輝先生(教頭)

School Data

1999年創立/全日制・単位制・総合学科/生徒数478人(男子117人、女子361人)/進路状況(2015年度)大学・短大56人、専門学校54人、就職16人、その他23人

住む生徒も大勢います。でも本校に通う生徒の感覚は都市生活者。そして学校の地元地域とは結びついていませんでした」と振り返る。

市立高校なのだからまずは岡山市を知ることから始めよう。市役所の各課から職員を招き、市政の取り組みについて語ってもらった。内容は商店街の賑わいづくり、自転車先進都市の推進、防災など7つ。生徒にとっては、何気なく生活している日常がただ当たり前にあるのではないことや、自分にもつながる課題があることを知る機会となった。

3年間の流れ(コラム1)は大きく変えないが、2年目からは大学教員からフィールドワークなどについて学ぶ時間も作った。自前主義ではなく、手を借りられるところからは借りる。ま

た、生徒が関わる地域イベントには会議室を提供する。なぜか。「高大接続改革が迫っています。大きな改革の時期には、今まで教員がやってこなかったことをやらなければいけない、間違いなく現場がもつと大変になるその前に、地域と共に生徒を育てる体制を作りたい(室先生)からだ。

2年目には駅前や保育所で調査を行うなど、生徒が外に出て行く動きが明らかに増えた。この先輩たちの成果を先行研究として次の学年に引き継げるよう、発表資料は電子データで残すようにした。「それが蓄積すれば地域のミュージアムとしての価値も出てきます」と上林校長は言う。

まち、ひと、学校を高い視点から見た改革

実は、同校の開校時には、シティキヤンパス構想というものがあった。「当時の仮校舎は岡山城や博物館に近い文化中心地区。近くの小学校跡地で体育を、道を挟んだ向かいの美術館でも授業を行っていました。学校という檻はなく、まち全体を学びの場にしようというわけです(上林校長)。

今年度から学校経営計画にも明文化された「まちなかのふるさと教育」では地域と関わる課外活動も意識して増やしている。例えば、市内の

川の豊かさを市民に伝える「西川水族館」、月に二度、学校の食堂を地域の人たちに開放する「らっかんランチ食堂」、部活動(コラム2、4)などのラボ的な活動を、教員に負担のかからない形で始めている。課外の活動を見て総学でもやりたいという生徒が出てくれば、総学の質も高まるからだ。

「生徒が地域のことをきちんと考えることは、主権者教育の原点でもあり、国際教育で大事な自分の地域を知っていることです」と言うのは前任校でも地域連携に取り組んでいた下村雅和主幹教諭。目指すは単なる原点回帰ではない。特色ある教育で目的意識をもった志願者を集め、地域を育てる人を育て、岡山市も元気になる学校づくりだ。今年度は授業改善を担当する「まなプロ推進委員会」とこれからの学校の姿を構想する「総合学科魅力化委員会」を立ち上げた。

再来年度に向けて準備を進めているのは「空きコマチャレンジ」。単位制でどうしてもできる空き時間に、地域の施設で働く。目標と計画を立て、職場を見つけて交渉し、働いて身に付いたことを発表することで学校設定科目の単位認定をするという構想だ。全国に類を見ない改革のこれからの注目していきたい。

コラム4 部活・授業等



2016年より生徒は全員、「地域研究部」に所属しており、教員の引率も部活動の範疇でカバーされるようになった。有志の活動として行われている「らじお部」は月に1回、FM岡山の番組に出演。「クニヨシ部」は地元出身の画家、国吉康雄を研究する有志活動。行政・民間・大学が共催する「国吉祭」を共に盛り上げている。また、工業系授業では県の「岡山県産木材ふれあい事業」に協力し、木工作品を製作して地域の学校や公共施設に提供する活動を行っている。

コラム3 らっかんランチ食堂



17年に岡山で行われた「食育推進全国大会」の活動の一環として、福祉分野の教員、生徒が地域の方と一緒に郷土料理を作ったことがきっかけ。独居高齢者にとって、高校生と一緒に食事をする場があることで、外出の動機や会話をする機会になると気付き、月に1回食堂を地域に開放している。

夏季休業中には、教員手作りの流しめんを振る舞ったことも。学校と地域の交流ができたことで、地域とのつながりを感じる生徒が増え、福祉の授業への学習意欲が高まっている。

コラム2 西川水族館



岡山市街の中心部にあり、遊歩道の周りに商店が広がる西川。2011年から始まった清掃活動には全校生徒の約1/3が参加している。16年には西川につながる県北の森、17年には流れ込む瀬戸内海での体験学習も有志で行った。

山、海、川のつながりを学んだ生徒は「西川水族館」を企画。捕獲した生き物の展示や、水中ライブカメラを使って市民に西川の自然を伝える活動を行っている。西川周辺で開催する歩行者天国イベントで展示を行うことで地域の賑わいづくりにも貢献している。